

神奈川県立図書館の「報徳思想関係資料」

兼松 俊介

はじめに

神奈川県立図書館（以下当館という）は2014年度に開館60周年を迎えた。その記念展示として、「コレクション紹介シリーズ」というテーマで、代表的なコレクションについて順次、紹介していくこととなった。2015年2月より「報徳コレクション」と題して「報徳思想関係資料」を中心に二宮尊徳に関する郷土資料の展示を行った。また、記念展示に先立ち、2014年4月から二宮尊徳についてミニ展示を行った。本稿は、それら資料の展示にあたり、「報徳思想関係資料」について調査した結果をまとめたものである。

1 報徳思想関係資料とは

「報徳思想関係資料」とは、その目録である『二宮尊徳および報徳教関係資料目録』¹⁾によれば、地域資料分類²⁾のK157「報徳教」に該当する資料である。当館では開館以来、郷土資料として二宮尊徳の著書、伝記および報徳教（道徳と経済との調和実行を説いた二宮尊徳の教え³⁾）に関する資料を収集してきた。1959（昭和34）年に刊行された『郷土資料解説目録（昭和30年11月30日現在）』によればK157に分類された所蔵資料は177タイトルである。次いで1961（昭和41）年に刊行された『郷土資料解説目録 第2（昭和40年12月31日現在）』によると31タイトル増加している。1960（昭和35）年に当館の所蔵資料と、小田原報徳二宮神社・小田原市立図書館など関係各方面からの出展資料を合わせ「福住正兄展」が開催されている。その時、報徳研究の第一人者である佐々井信太郎の特別講演が行われている⁴⁾。

1972（昭和47）年に神奈川県立文化資料館（以下「文化資料館」という）が設立され、当館の地域資料が移管されてからは、より積極的に「報徳思想関係

資料」を収集保存し、利用に供してきた。そして1993（平成5）年の文化資料館廃止に伴い、当館に地域資料課⁵⁾が新設され、資料が引き継がれた。「報徳思想関係資料」の収集は現在も継続して行われている。

『二宮尊徳および報徳教関係資料目録』は、1998（平成10）年12月までに受け入れた資料約500タイトルを収録しているが、本稿は2015年9月末までに受け入れた資料997タイトルを対象とする。

2 二宮尊徳の生涯

以下に二宮尊徳の生涯について述べる。内容については『二宮尊徳の生涯と業績』⁶⁾『小田原市史 通史編〔2〕近世』⁷⁾を参考にしてまとめた。

二宮尊徳（1787—1856）は、足柄上郡栢山村（小田原市）に自作農・利右衛門の長男として生まれた。幼名は「金治郎」だが、小田原藩士に取り立てられた際に「金次郎」と表記されて以来、その名が通称となった。幕臣となった頃から「尊徳」と名乗っている。

栢山村は洪水が多い土地柄であった上、父は人に施すことが多かったため家産が減じ、その苦勞からか尊徳が14歳の時に没する。一家は離散し、程無く母も亡くなった。尊徳は叔父の万兵衛に預けられて節儉の精神を教え込まれるが、これが「積小為大」の思想の礎となったといわれる。例えば、夜に行燈の明かりで読書をする、叔父から油がもったいない、と叱られたため、友人から約5勺の菜種をわけてもらい、川の土手に植えたところ、約7升の油菜が取れ、油2合と交換できたという逸話が残っている。

20歳で独立し、日雇い稼ぎなどにより貯めた資金で土地を買い増していった。これらの土地は洪水で免租地となっており、小作に出して収益を得ることができた。また、当時の通常の利息である年利20%でお金を貸して収入を得ている。こうして10年後には約4haを保有する豪農になった。

1812（文化9）年、小田原藩家老の服部家に奉公する。尊徳は奉公人の間で、節約して得た余剰金を低利息で貸借し合う「五常講」という信用組合のようなものを作った。やがて借財に悩む服部家が、尊徳に財政再建の依頼をしてきた。尊徳は、藩主の手元金1,000両を下付してもらい、年利8%で貸し付ける「八

朱金」などを実施して借財を借り換えた。こうして「分度」（自己の収入に応じて支出を抑えること）、「推譲」（分度で生じた余財を社会のために譲ること）という報徳仕法を確立していく。

1818（文政元）年に小田原藩主・大久保忠真は、孝行人や篤農家の表彰を酒匂川の河原で行ったが、尊徳もその中に含まれており、これが忠真との最初の出会いとされている。1821（文政3）年に尊徳は、何種類もあった藩の年貢収納用の枒を統一するよう忠真に進言し、聞き入れられて新たな枒を作った。

忠真は尊徳に藩の財政復興を任せようとしたが、一農民が藩政に関わることに群臣が反発したため、桜町領（栃木県真岡市）の復興を命じた。桜町領は大久保家の分家・旗本宇津家の知行地である。尊徳は、厳密な調査をして上納米の限度（分度）を設定し、それより増収した分は、荒地開発など村のために使うことを小田原藩に提案して承認を得た。そして低利融資、入植者による開墾などを行い、役人の妨害を受けつつ復興を成し遂げ、天保の飢饉の際は隣村に食糧を援助するまでになった。一方、村の寄合を芋コジ（芋の汚れを落とす動作で、心の清浄化を表現）と名付け、表彰や貸し付けを決定する投票や、村役人の選挙を行う場とした。1831（天保2）年に忠真から桜町領の復興方法が『論語』（憲問編）の「以德報徳」（徳を持って徳に報いる）に当たると評価されて、尊徳は「報徳」という言葉を使い始めたという。

やがて尊徳の評判は広がり、各地から復興依頼が相次ぐ。青木村（茨城県）の復興でも、分度を定め余財を開発に充てる報徳仕法を進めた。また、村の用水を引く桜川の堰工事では、茅葺屋根を沈めてから石を投げ込む独特の工法により費用と工期を短縮した。その他、細川藩領谷田部（茨城県）や茂木（栃木県）などの復興にも携わった。烏山藩（栃木県）ではお救い小屋を設置し、粥を施して窮民を救った。

1836（天保7）年から翌年にかけて大飢饉がおき、尊徳に小田原領内の飢民救済の依頼が来る。尊徳は御手元金千両を預かり、困窮の度合いに分けて米と銭を年賦償還で貸し付け、164ヶ村を救った。しかし1837（天保8）年に忠真が亡くなると小田原藩は分度を約束しなくなり、結局、分度が定められないまま鴨宮三新田・曾比村（小田原市）、御殿場・小山（静岡県）などに対し、領

民の熱意によって仕法が実施された。尊徳は報徳仕法を「仕法雛形」として冊子にまとめ村役人に渡している。こうした領民の動きを不穏に感じた小田原藩は1842（天保13）年、領民との接触を禁じ、領内への立ち入りも制限した。1846（弘化3）年には、報徳仕法が廃止される。

天保の改革を進める老中・水野忠邦は1842年、尊徳の土木技師の腕を評価し、御普請役格として利根川分水路の工事の調査を命じる。この事業は、水害防止と輸送路の確保を目指し利根川の水を印旛沼から江戸湾へ流すというものであった。尊徳は、周辺の村を無利息金貸付によって立て直した後、余裕のある農家から上納される冥加金を工事費に当てるよう提案したが、受け入れられなかった。翌年、忠邦は失脚し工事は中止となる。

1844（弘化元）年、日光東照宮領の復興計画を立てるよう命じられ、84冊の仕法雛形を作成し提出する。1853（嘉永6）年には復興に着手するよう命じられ、自力で1万両を調達し回村を続けた。1855（安政2）年には今市（日光市）に移住するが病が悪化し、仕法は息子（尊行）や門弟が進めた。翌年、70歳の生涯を終えている。

3 報徳思想関係資料の概要

次に、コレクションの概要について時代別、内容別に分けて述べてみたい。

3.1 時代別内訳

図2は、報徳思想関係資料の各出版年の所蔵タイトル数を、時代毎に区切ってグラフにしたものである。所蔵資料で最も古いものは1873（明治6）年に刊

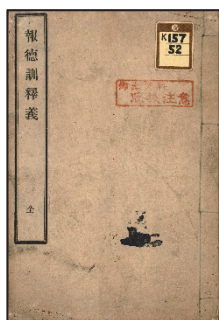


図1 『報徳訓釋義』

行された福住正兄著『報徳訓釋義』であるから、明治時代は実質38年間、大正時代は14年間である。昭和時代は長いため、戦前の18年間と戦後に分け、さらに戦後は中期と後期で21年間と20年間に分けた。そして平成時代は26年間である。一見して大正時代の所蔵タイトル数が極端に少なく、昭和初期が最も多いことがわかる。大正時代が短いためと思われがちだが、一番多い昭和初期と4年間しか変わらないことを考えると、時代の長さは

所蔵タイトル数に比例していない。

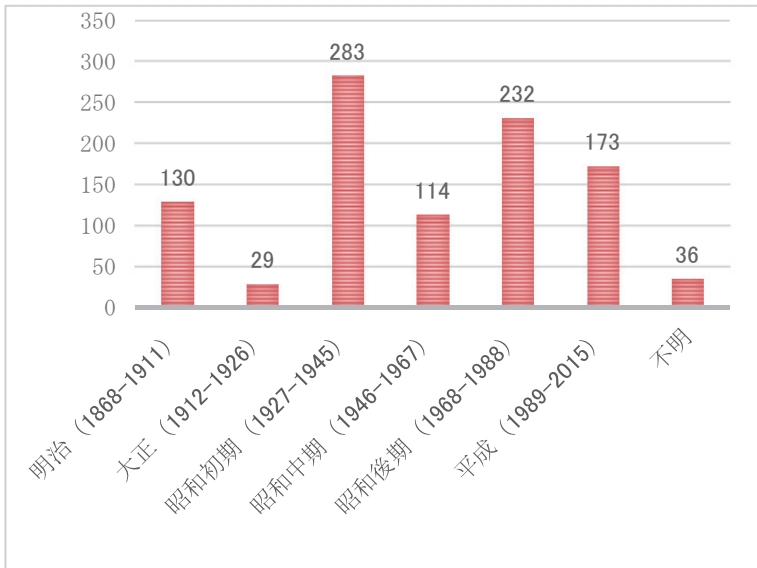


図2 報徳思想関係資料の年代別所蔵タイトル数

明治時代は、富田高慶・斎藤高行・福住正兄・岡田良一郎ら尊徳の教えを直接受けた門弟がまだ存命していた時代で、活発な報徳運動が行われ、報徳社が数多く結成され、重要な著書も刊行された。時代が古いために資料が失われたことや、印刷技術が未発達で刊行部数が少なかったことから、所蔵タイトル数は多い方ではないが、『報徳記』『報徳外記』『報徳方法 富国捷徑』『報徳富国論』など報徳研究の礎となる資料が揃っている。

大正時代は、報徳運動が停滞していた時代で、背景には銀行・産業組合・保険事業の発展といった社会の近代化の中で、報徳社の存在意義が希薄化していたことが挙げられている⁸⁾。このようなことが、所蔵タイトル数が少なくなった理由として考えられる。

昭和時代初期は、報徳運動が教化手段として注目され、学校教育や社会教育に広まった時代である。小学校に薪を背負い歩きながら書を読む金次郎像の建立が流行したのもこの頃で、自力更生運動を背景として、尊徳没後 80 周年に当たる 1935 (昭和 10) 年にピークを迎えた⁹⁾。従ってこの時代は、小田原第

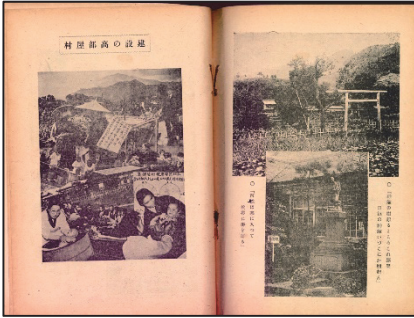


図3 『報徳教育の研究と実践』

一尋常高等小学校編『教材としての二宮先生』や神奈川県中郡高部屋村国民学校編『報徳教育の研究と実践』といったような教育書の所蔵が多い。また、佐々井信太郎の『二宮尊徳全集』全36巻が含まれていることも所蔵タイトル数が多い一因となっている。

戦前に少年・金次郎が国民教化に利用され、報徳思想が国家主義に取り込ま

まれたことへの反発から¹⁰⁾、戦後になると、尊徳が民主主義教育から逆行していると多くの学者、評論家、教育家から批評された。『永遠に生きる二宮尊徳』によると、小田原市栢山に尊徳記念館をつくらうとした際にも神奈川県

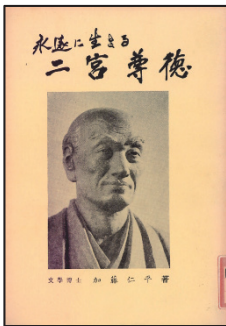


図4 『永遠に生きる二宮尊徳』

組合協議会から批判が出て、東京の大新聞に大きく取り上げられた、と記されている¹¹⁾。このようなことが、昭和中期に所蔵タイトル数が少ない原因として考えられる。

昭和後期から平成時代は、二宮尊徳の価値が見直された時代で、報徳思想を活かして問題解決を図ろうとする様々な書物が、現在まで出版されている。それらは企業経営の心構え、人生の処世訓、地域振興のヒント、教育現場での活用など多岐に渡る。ユニークなところでは、尊徳の教えをスポーツ科学に活かそうという

1983(昭和58)年に出された大石三四郎著『今こ

そ二宮金次郎』や、地球温暖化対策をテーマに2007年に出された榛村純一著『森林と報徳と温暖化と』がある。但し、所蔵タイトル数の増加は、1977(昭和52)年に再出版された『二宮尊徳全集』と1980年代に復刻された機関誌『斯民』(しみん)に負うところが大きく、平成に入ると所蔵タイトル数は減少している。

3.2 分類別内訳

1章で述べたように「報徳思想関係資料」は、すべてK157「報徳教」に分類されている。これは資料群をコレクションとして一つにまとめるためと考えられ、データを抽出する際に、非常に有効であった。しかし実際には、「報徳思想関係資料」は伝記や思想書など様々な種類の資料を含んでおり、その概要を把握するために、内容による分類を行う必要があった。資料の仕分けに際しては、小田原市立図書館の『報徳集書解説目録』の分類表¹²⁾を参考にした。同目録に掲載されていない資料については、「国立国会図書館サーチ」などを利用して他館ではどう分類されているか調査をした。その結果、表1のように資料を大別した。なお、「伝記」には被伝者の日記、書簡、言行録、肖像画、筆蹟なども含めることとした。また、「その他」には軸物、教科書、楽譜、戯曲、レコードなどがある。

表1 報徳思想関係資料の分類別タイトル数

	分類	タイトル数	割合
1	伝記	199	20.0%
2	報徳思想の理論書や研究書	186	18.7%
3	逐次刊行書	157	15.7%
4	叢書、全集	129	12.9%
5	論文・講演集、随筆、雑記など	73	7.3%
6	報徳仕法の手引書・応用論（ビジネス書含む）	68	6.8%
7	参考書（目録、年表、年代記、図譜、市史など）	43	4.3%
8	児童書	37	3.7%
9	史跡ガイドブック、絵葉書	36	3.6%
10	報徳社・報徳講その他報徳団体の規則や葉など	35	3.5%
11	その他	34	3.4%
	計	997	100.0%

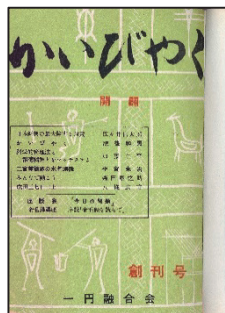


図5 『かいびやく
創刊号』

最も多いのは富田高慶著『報徳記』や童門冬二著『小説 二宮金次郎』などの伝記で、全体の2割に及ぶ。そのうち42タイトルは安西悠子著『瑠璃色の水面悲しき 二宮尊徳・尊行・尊親、三代の生涯の記録』や佐々井信太郎編『福住正兄翁傳』といった、近親者や門人たちの伝記である。次いで福住正兄著『報徳教祖 二宮翁夜話』や斎藤高行著『報徳外記』など報徳思想の理論書、『斯民』(全40巻)や『かいびやく』(全49巻)などの逐次刊行書と続いており、この3分類で全体の半数を占める。なお、『斯民』は1906(明治39)年に設立した半官半民の「報徳会」の機関誌である。『かいびやく』は1952(昭和27)年に設立し、佐々井信太郎が初代理事長を務めた「一元融合会」の機関誌である。

本コレクションには、尊徳とゆかりの深い地域である真岡市、日光市の市史が含まれており、当初、別項目としていたが、14タイトルと数が少なかったため、参考書に含めた。また、1970年代後半から現在に至るまで、酒井貴資著『生きることの法則 二宮尊徳に学ぶ人生経営・企業経営』や、松井健一著『最強の経営コンサルタント二宮金次郎の教え』など尊徳の教えをビジネスに活かそうという図書が度々刊行されているが、所蔵は12タイトルと意外に少なかったため、報徳仕法の応用論の一種として分類した。

児童書も3.7%と少なく見えるが、明治～昭和初期の児童書の定義が曖昧で、特に教育書との区別が非常に困難であった。本稿では教育書と児童書を分けて、さらに戦前に学校が刊行した教科書と見られる12タイトルは「その他」に含めた。

児童書も3.7%と少なく見えるが、明治～昭和初期の児童書の定義が曖昧で、特に教育書との区別が非常に困難であった。本稿では教育書と児童書を分けて、さらに戦前に学校が刊行した教科書と見られる12タイトルは「その他」に含めた。

4 報徳思想関係資料の紹介

次にコレクションの代表的な資料やユニークな資料を選んでいくつか紹介する。尊徳の死後、彼の思想と仕法は多くの門弟たちに引き継がれ、門弟たちの作品は、近代以降、国民に大きな影響を与えるとともに報徳運動の教材となっていく¹³⁾。ここでは特に尊徳の門弟に注目しつつ、資料を紹介していく。

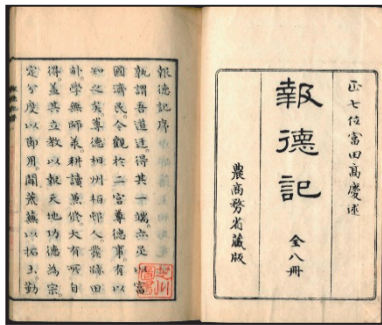


図6 『報徳記』

4.1 伝記

『報徳記』は、尊徳の最も古い伝記である。1856（安政3）年に尊徳が没すると、門弟の間で伝記編纂の声が上がり、尊徳と親交のあった寺門静軒に執筆を依頼した。しかし、文章に真にせまるものがないということで、同年、一番弟子の富田高慶が一気に書きあげたという。翌年、推敲して8巻とした¹⁴⁾。高慶の入

門以前の事柄は伝聞に基づくもので、その後の記録も前後関係が明確ではないが、活気に満ちた感動的な文章と評される。1880（明治13）年に旧相馬藩主・相馬充胤が浄書して天皇に献上し、1883（明治16）年に宮内庁で印刷された¹⁵⁾。当館所蔵のものは1885（明治18）年に農商務省へ版權が移されて大日本農会から刊行されたものである。

富田高慶（1814—1890）は、相馬藩（福島県相馬市・南相馬市）の藩士・斎藤嘉隆の次男に生まれ、江戸へ出て屋代弘賢などに学んだが、尊徳の仕法を聞いて、1839（天保10）年、桜町に尊徳を訪ねて入門、小田原・日光などの仕法で尊徳を助けた。また、尊徳の娘・ふみと結婚している。1845（弘化2）年に高慶は相馬へ帰り、藩財政の再建と農村救済に当たった。尊徳は相馬藩に1655（明暦元）年来の帳簿を出させ、平均収納高を算出して『為政鑑卸土台帳』を著し、改革の方針とした。高慶は農業生産を指導し、相馬藩の仕法をほぼ成功させている¹⁶⁾。しかし廃藩置県に伴い、行政式仕法（幕府や藩など公権力が主体となり、藩政改革など行政の一環として実施される仕法）を諦め、結社式仕法（民間で報徳社を結成して村や構成員の経営・生活の改善向上を目指して実施される仕法）を行うため1877（明治10）年、興復社を設立し、尊徳の孫である尊親を副社長とした。

『報徳開拓者 安居院義道』は1953（昭和28）年に出版された、報徳仕法の伝道者・安居院庄七の伝記である。庄七の史料は少なく、関係者の聞き書きなどをもとに執筆された本書が主な典拠となっている¹⁷⁾。巻頭に被伝者の肖像画が

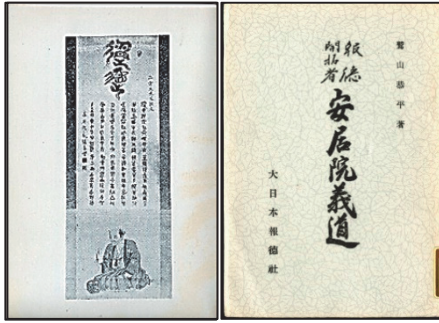


図7 『報徳開拓者 安ん院義道』

尊徳は面会を断わり、庄七は約1ヶ月滞在したが、結局会えなかった。しかし門弟や来訪者から尊徳の教えを聞き、仕法書類の筆写に打ち込んだという。帰宅すると白米を玄米の値で売る元値商いなどを行って、利益を得た。また1843(天保14)年には、小蓑毛村(秦野市)の復興を指導している¹⁸⁾。やがて弟と旅に出て、1845年(弘化2)年頃、河内国の杉沢作兵衛から万人講について学ぶが、その勧誘で訪ねた遠江国長上郡下石田村(静岡県浜松市)の神谷与平治に報徳仕法のことを教えた。与平治は地元で報徳社を結成する。さらに佐野郡倉真村(静岡県掛川市)の豪農、岡田佐平治も感銘を受け、地元で報徳社を結成した。こうして遠州各地に報徳社ができていった。1853(嘉永7)年に庄七と遠州の代表者は、日光で初めて尊徳から教諭を受けた。その後、報徳仕法の伝道中に浜松で客死した¹⁹⁾。



図8 『福山瀧助翁』

掲載されている。著者の鷺山恭平は、大日本報徳社の社長を務めた。

安居院庄七(1789—1863)は、大住郡蓑毛村(秦野市)の大山修験者・朝田家の次男で、曾屋村(秦野市)の穀物商の安居院家に婿入りする。後に米相場で失敗し、低利で金を貸すという尊徳の噂を聞いて

1842(天保13)年、桜町に赴いた。

『福山瀧助翁』は報徳事業家・福山滝助の伝記である。小田原市城内国民学校から出されたもので、「昭和17年11月20日寄贈」の記載があるのでこの頃の刊行と推測される。巻頭には被伝者の肖像画の写真が貼付してある。

福山滝助(1817—1893)は、小田原古新宿(小田原市)の菓子商・里見家の次男に生まれ、幼名を多喜蔵という。

ある時、行商中に菓子が全く売れない村に出会い、理由を住民に訊くと「報徳が行われているため」と言われた。その意味を同郷の藩士に尋ねて報徳仕法のことを知り、感銘を受けたとされる。1843（天保14）年に小田原の有志が尊徳から160両を得て、小田原報徳社を結成する。数ヶ月後に多喜蔵も加入し、尊徳と面会を果たした。翌年に隣村の福山家を継ぐ。その後、小田原報徳社は貸付金の未返済が増え、社員も激減する。そこで1848（嘉永元）年から社員が縄ない代金を積み立て、多喜蔵も家業収入の約2割を毎年推譲して報徳社を再興した。1861（文久元）年に滝助と改名。一方、安居院庄七を失い報徳運動が衰退した遠州では1867（慶応3）年、岡田良一郎を福住正兄のもとに派遣して指導を要請した。福住は滝助に指導を依頼し、滝助は1871（明治4）年に遠譲社を磐田郡三川村（静岡県袋井市）に創立して98社の分社を設立させた。さらに、滝助の話に感銘を受けた三河国（愛知県）の田中伊兵衛が1882（明治15）年、三河国報徳社を創立している。以後も滝助は農村復興に当たり、三河国八名郡山吉田村（愛知県新城市）で死去した²⁰⁾。



図9 『二宮尊徳と
剣持広吉』

『二宮尊徳と剣持広吉』は、1907（明治40）年に出版された、足柄上郡曾比村（小田原市）の名主・剣持広吉の伝記である。著者の留岡幸助（1864－1934）は、東京巢鴨と北海道に家庭学校を設立した人物で、駿河報徳社を見学した際、報徳運動に感銘を受けたという²¹⁾。本書にて広吉と尊徳がやり取りをする旅館「塔の澤福住」は、後に福住正兄が継ぐ湯本の福住旅館から分家した、福住喜平治の「福住樓」のことである²²⁾。尊徳は1840（天保11）年に「塔ノ沢の旅館・福住喜平治方」で長逗留をしている²³⁾。

剣持広吉（1798－1870）は、足柄上郡牛島村（開成町）の組頭・草柳家の子として生まれた²⁴⁾。1819（文政2）年に曾比村の名主・剣持家の養子となる。広吉が22歳の頃に商用で小田原に行った際、尊徳と偶然、道連れとなった。1837（天保8）年の飢饉で曾比村が疲弊し、広吉は周囲から報徳仕法を勧めら

れ、箱根宮ノ下の藤屋に滞在していた尊徳を訪ねる。尊徳は入浴中で、広吉が風呂に入って来ても、無視する態度を取った。広吉は立腹して帰るが、その後、報徳役所代官の鵜沢作右衛門に、「塔の澤福住」にいる尊徳を訪ねるよう勧められ、渋々行くと今度は、尊徳は非常に喜んで広吉を出迎えた。そして夜更けまで語り合い、広吉は尊徳の見識の高さに驚き門下に入ったという²⁵⁾。1839

(天保10)年より、曾比村の当時の名主だった庄左衛門と、後に名主格となる剣持与右衛門の3人で、村の借金6,248両を処理するため報徳仕法を進めた。



図10 『報徳遺蹟写真集』より

農業用水堀(報徳堀)の復旧などを行い、7年後に借金は735両に激減する。1842(天保13)年には、尊徳の印旛沼調査に広吉も参加している。1860(万延元)年に名主に任じられた。藩が仕法を中止した後も広吉らは仕法を継続したが、1861(万延2)年、村人81名が広吉の厳格さに不満を持ち、他村の名主に訴えている²⁶⁾。

尊徳の肖像画として有名な図10の絵(小田原報徳二宮神社蔵)は、広吉が絵師・岡本秋暉をして、1842(天保13)年、尊徳56歳の時、小田原藩士・矢野筈右衛門宅で、障子の隙目からその姿を写させたものといわれる²⁷⁾。

4.2 報徳思想の理論書や研究書



図11 『報徳教祖 二宮翁夜話 巻之1』

『報徳教祖 二宮翁夜話』は、報徳伝道者・福住正兄が編集した尊徳の語録で、1884~1887(明治17~20)年にかけて出版された。巻頭に福住の肖像画が掲載されている。1847(弘化4)年に尊徳が下野国芳賀郡東郷村(栃木県真岡市)へ復興に赴いた際、福住も同行して尊徳の教えを書き留めているが、そのメモを中心に『如是我門録』

という稿本ができ、本書の底本となった²⁸⁾。福住の著作中最も普及し、現在でも一般向けに尊徳の思想を紹介する書物で典拠とされることが多い。但し、福住による尊徳の教説への潤色、創作も含まれていることが指摘されている。

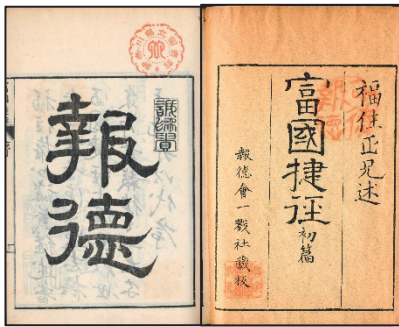


図12『報徳方法 富国捷徑 初編』

同じく福住が著した『報徳方法 富国捷徑』は、初編から4編が1873～1875（明治6～8）年、首巻が1885（明治18）年に出版された。当館の所蔵本は1874（明治7）年以降の出版である。報徳社の結社に必要な社中規則、日課銭や無利息金貸付の計算の雛型など具体的な方法とともに、報徳運動の意義や考え方なども述べられており、報徳運動の普

及をはかる実践的な書物である。本書は、福住が傾倒した平田国学の影響が色濃く、報徳思想が神道的に解釈されているという。

福住正兄（1824－1892）は大住郡片岡村（平塚市）名主・大沢市左衛門の五男として生まれ、幼名を政吉という。村が天保の飢饉で疲弊した折、父と長男の小才太は、農村復興に報徳仕法が効果的と聞いて、1839（天保9）年に小田原の尊徳を訪ねて入門する。政吉も父の勧めで1845（弘化2）年、尊徳に入門した。1850（嘉永3）年、箱根湯本の凋落した旅館を営む福住家へ養子に入り九蔵と名乗る。そして復興に向けて、自分の旅館が入った錦絵『七湯方角略図』を歌川広重に描かせて配った。また安価で貴賤による差別をしない経営に努め、翌年に名主になると、適正営業を守る規約書に籠屋や按摩まで加盟させた。1852（嘉永5）年に、片岡村名主となった小才太、兄で真田村名主の上野七兵衛らと報徳仕法を合流させて克讓社を設立する。一方、平田篤胤の国学を学び、1870（明治3）年に小田原藩の国学助教授に任じられ、正兄と名乗る。そして、1872（明治5）年に国が教導職を設けると、正兄は報徳教会を設立し、翌年、国から教導職に任命された。1874（明治7）年には小田原～湯本間の道路拡張工事も手掛けている。1876～1878（明治9～11）年には、自分の旅館を木骨石造建築に建て替えており、その萬翠楼と金泉楼は現在、国指定重要文化財とな



図13 『報徳外記 巻上』

仕法の理論と方法について概略を漢文で述べたもので³⁰⁾、「行政式仕法の理論書」と呼ばれる³¹⁾。1885（明治18）年、駿河東報徳社から初版が刊行されており、当館所蔵の表紙にも「駿河東報徳社版」とある。

『二宮先生語録』は1905（明治38）年に出版された。齋藤高行が、尊徳の聞書を主に記した自著の『報徳秘稿』から選んだものを漢文化したと見られており、尊徳に直接関係する文献として重視されている。

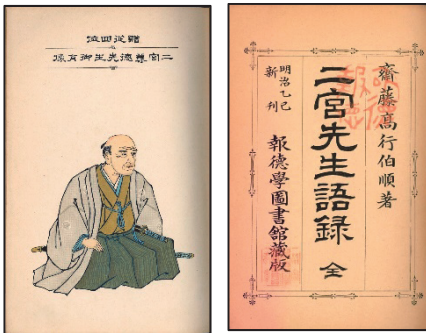


図14 『二宮先生語録』

齋藤高行（1819～1894）は相馬藩士で、富田高慶の甥に当たる。齋藤完行の長男として中村（福島県相馬市）に生まれた。藩の命により江戸留守書役として筆道を勉強中だった1845（弘化2）年、日光仕法雛形取調書類の浄書を機に尊徳の偉大さを知ったという。同年、門下に入り、1851（嘉永4）年まで隨身した。高慶と共に相馬仕法、今市（栃木県日光市）仕法を指導した³²⁾。

『報徳富国論』は1880～1881（明治13～14）年に出版された。著者の岡田良一郎は、報徳の実利性を強調することにより、それを広め、国家の評価を得ようとしたという。本書でも財を生じてこそ徳を実践することができる、という「財本徳末」論を説き、富田高慶から激しく批判されている³³⁾。

っている。1884（明治17）年に教導職が廃止されると民間結社の報徳会を設立し、報徳思想の普及に努めた²⁹⁾。

『報徳外記』は、齋藤高行が1854（安政元）年、病氣療養中に執筆したもので上下2巻から成る。外記とは私記と同様の意味である。相馬仕法を実践した体験に基づいて、報徳

齋藤高行（1819～1894）は相馬藩士で、富田高慶の甥に当たる。齋藤完行の長男として中村（福島県相馬市）に生まれた。藩の命により江戸留守書役として筆道を勉強中だった1845（弘化2）年、日光仕法雛形取調書類の浄書を機に尊徳の偉大さを知ったという。同年、門下に入り、1851（嘉永4）年まで隨身した。高慶と共に相馬仕法、今市（栃木県日光市）仕法を指導した³²⁾。

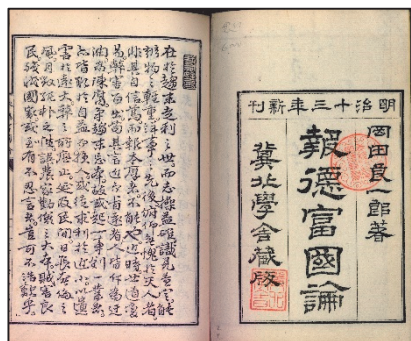


図 15 『報徳富国論』

岡田良一郎 (1839-1915) は佐野郡倉真村の豪農・岡田佐平治の長男として生まれ、淡山と号した。1854 (安政元) 年、下野国に行つて尊徳の門弟となり、2年間、直接尊徳の教えを受けた。その後も2年間、二宮尊行・富田高慶の指導を受け、1858 (安政5) 年、二宮塾を退学して故郷に帰つた。1875 (明治8) 年、遠江国報徳社が設立し、佐平治が初代社長となる。1877 (明治10) 年には良一郎が二代目社長に就任した。翌年、掛川農学社を創立する。1885 (明治18) 年、浜松と見付 (静岡県磐田市) に報徳学館を設立した。1890 (明治23) 年には衆議院議員となる。1898 (明治31) 年に政治活動から身を引いて以降は、報徳社を全国に広めることに努めた。1911 (明治44) 年、遠江国報徳社は大日本報徳社と改称し、良一郎は翌年社長を退き、長男の岡田良平が社長に選任される。1934 (昭和9) 年には弟の一木喜徳郎が後任に就いた。さらに良平と喜徳郎は政府の官僚・政治家として報徳運動を広めた³⁴⁾。

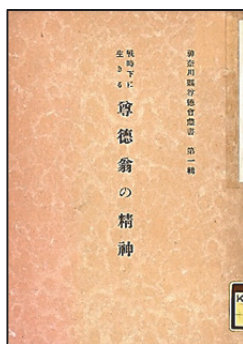


図 16 『神奈川県尊徳会叢書 第1輯 戦時下に生きる尊徳翁の精神』

4.3 叢書、全集

『神奈川県尊徳会叢書』は神奈川県尊徳会が刊行したもので、第1輯『戦時下に生きる尊徳翁の精神』(1941年)、第2輯『国運振興と報徳』(1941年)、第3輯『翼賛体制と報徳』(1942年)、第4輯『勝ち抜く方策』(1943年)、第5輯『二宮先生と県下の門人並事績』(1943年)がある。題名から窺えるように、戦時色がとても強い内容となっている。神奈川県尊徳会は、報徳精神の普及徹底を図る目的で、神奈川県知事・松村光麿が会長となって1941 (昭和16) 年に設立した。松村は以前に栃木県知事を務めており、栃木県での報徳運動の高揚

に比べて神奈川県の劣勢を感じていたという³⁵⁾。なお、『神奈川県尊徳会要覧』によると、顧問に佐々井信太郎の名がある³⁶⁾。佐々井は、「國策順應の處世方法としての分度生活」など叢書の第1輯～第4輯に執筆している。

佐々井信太郎(1874-1971)は、氷上郡葛野村(兵庫県丹波市)に生まれた。1885(明治18)年に小学校を中退して以来、独学で勉強した。1894(明治27)年に父が借金を残したまま急死すると、母も病床につき、佐々井は借金の弁済に努めた。1895(明治28)年に尋常高等小学校の教員試験に合格し、地元の小学校に務めた。1902(明治35)年に中等教員地理科検定に合格し、翌年に神奈川県立第二中学校(現県立小田原高校)に赴任した。初代校長・吉田庫三は尊徳を推奨し、『報徳記』を授業で教え、職員に研究を促した。佐々井は、尊徳と自分の境遇が似ていると感じ、報徳研究に没頭していく³⁷⁾。1918(大正7)年には神奈川県教育委員会の委託を受けて県下の偉人資料の調査を行い、『新

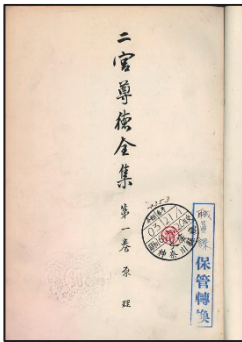


図17『二宮尊徳全集
第1巻』

報徳記』を刊行した。同年、神奈川県通俗教育主事に就任する。1922(大正11)年に東洋大学の教授となり、県を退職して大日本報徳社副社長に就任する。翌年には小田原系(福住系)報徳社の連合会を結成し、その幹事長を兼任した。1924(大正13)年には全国の報徳社が大日本報徳社に統一された。1928(昭和3)年には神奈川県匡済会常務理事になる。一方、尊徳の遺稿を整理編纂し、1927~1932(昭和2~7)年にかけて『二宮尊徳全集』全36巻を刊行した。1931(昭和6)年、小笠郡土方村(静岡県)の自力更生運動で報徳仕法を指導した。これを皮切りに全国で仕法の実施・講演を行う。戦時中は報徳運動を通じて総力戦体制に協力した。1947(昭和22)年に公職を追放されるが、1950(昭和25)年に特免になった。1957(昭和32)年に神奈川県文化賞を受賞し、1965(昭和40)年には勲三等に叙せられ、瑞宝章を賜わっている³⁸⁾。



図18 『報徳遺蹟写真集』

終戦の年に刊行されている。

4.4 史跡ガイドブック

『報徳遺蹟写真集』は尊徳の生家や「菜種栽培地」など尊徳ゆかりの史跡の写真と、尊徳の肖像画の写真を合わせて33枚、台紙に差し込んだもので、それぞれに由来などの説明が付いている。奥付に「昭和20年5月10日」とあり、「報徳思想関係資料」の中では唯一、

4.5 児童書

『二宮尊徳翁』は1891（明治24）年に幸田露伴（1867－1947）が刊行したもので、当館では初版を所蔵している。口絵に薪を背負い歩きながら本を読む

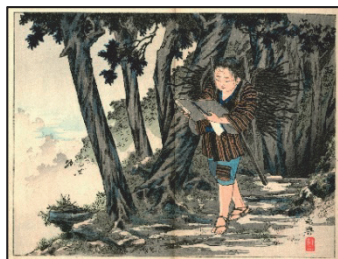
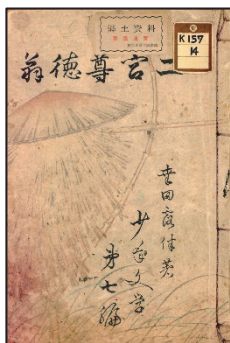


図19 『二宮尊徳翁』

金次郎の姿（負薪読書図）

が、初めて登場している。描いたのは小林永興

（1866～1933）という狩野派に連なる画家で、木版多色摺りである。本文には「大学の書を懐中に常離さず、薪伐る山路の往返歩みながらに読ま

れける心掛こそ尊けれ」と書かれており、金次郎が歩きながら儒教の経書「大学」を読んだとされている。また、「はしがき」に「報徳記の他は本伝に関すること少ければ敢て参酌せざりき。」とあり富田高慶の『報徳記』以外は参考にしなかった、と記される。ところが、『報徳記』には、「採薪ノ往返ニモ大学ノ書ヲ懐ニシテ、途中歩ミナカラ之ヲ誦シ、」とあって、「大学」を懐に入れて歩きながら口ずさんだ、となっており、手に持って歩きながら読んだとは記さ

れていない。従って「負薪読書図」は創作とされており、江戸時代の狩野派絵師の「朱買臣図」が手本と考えられている。朱買臣は、家は貧しかったが読書が好きで、薪を担ぎながら書を読み、最後には官僚に出世した中国漢代の人物と伝えられている³⁹⁾。

4.6 その他

『福住正兄万福講定宿びら』は、高さ95cm、幅37cmで、「びら」とあることから、説明や広告などを記載した掲示物と見られる。先出の『郷土資料解説目録（昭和30年11月30日現在）』に写真つきで掲載されている。内容は、

以下のような文字が読み取れる。(○は判読不明)

「従四位福羽美静君総掌 ○○社定休泊所
萬福講 講元 福住正兄」



図20 『福住正兄
万福講定宿びら』

「万福講」とは、『福住正兄翁傳』によると福住正兄が組織した団体で、藤沢～沼津間において宿泊客に行先の旅館を紹介し合う「差宿(さしやど)」の仲間において、旅客に雨傘を提供することを目的としていた。万福講に加入した宿は各々雨傘を用意しておき、雨具のない客に金40銭と引き換えに傘を貸し、客は傘が使用済みとなった時か、次の宿に泊まった時に傘を宿に渡し、宿から40銭が

支払われる仕組みとなっている。もし客が傘を返さなければ、40銭で傘を買取ったことになるという⁴⁰⁾。

福羽美静(1831-1907)は、石見国(島根県)津和野藩士で、大国隆生を慕って報本学舎に入り、国学を学んだ。1868(明治元年)年、徴士として新政府に呼ばれ神祇事務局権判事となる。ついで神祇少副となり、文部省御用掛、元老院議官などを経て、1890(明治23)年に貴族院議員となっている⁴¹⁾。また文中の「従四位」という官位を示す記述については、『明治初期官員録・職員録集成』によれば、1870(明治2)年5月に「福羽五位」、同年6月に「福羽四位」となっていることがわかる⁴²⁾。

おわりに

今回の調査により、当コレクションに含まれていない報徳思想関連の所蔵資料がいくつか確認された。例えば福住正兄に報徳思想を学び、報徳二宮神社創建時の社掌となった農政家・草山貞胤の伝記『草山貞胤翁』⁴³⁾、大澤小才太の片岡村の復興事業を解説した『幕末の村おこし』⁴⁴⁾、秦野市農業協同組合の図書より安居院庄七関連の部分を抜き出した『天地の詩〔抜刷〕』⁴⁵⁾、『福住正兄展出品解説目録』などである。これらを「報徳思想関係資料」に含めることで、今後の展示等に一層、役立てることができると考える。

また、「報徳思想関係資料」は伝記、思想書、論文、随筆、児童書、教科書など様々な種類の資料が含まれているにも関わらず分類が全てK157であるので、OPACで検索していても、タイトルだけでは何の資料かわからないものも多い。冊子体の『二宮尊徳および報徳教関係資料目録』もタイトルの五十音順に配列されているのみである。データの注記の内容をもっと充実させたり、内容によって資料を類別した目録を作成することにより、当コレクションが利用しやすい環境を整備していくことが今後の課題であろう。

注・引用・参考文献

- 1) 神奈川県立図書館編。二宮尊徳および報徳教関係資料目録。神奈川県立図書館，1999，「凡例」－「はじめに」，（地域資料目録・主題別シリーズ，3）。
- 2) 当館独自の分類方法で、分類記号Kを用い、NDC（日本十進分類法）をベースにしている。
- 3) 松村明編。三省堂編修所編。大辞林。第2版，三省堂，1995，p.2361。
- 4) 神奈川県立図書館編。福住正兄展出品解説目録。神奈川県立図書館，1960，75p。
- 5) 平成22年4月に地域資料課業務、図書課と情報整備課と地域情報課に再編成された。
- 6) 大貫章。二宮尊徳の生涯と業績。幻冬舎ルネッサンス，2009，p.21－164。
- 7) 小田原市編。小田原市史 通史編〔2〕近世。小田原市，1999，p.756－839。
- 8) 早田旅人。近代西相模の報徳運動。夢工房，2013，p.122，（小田原ライブラリー，22）。
- 9) 前掲6) p.142。
- 10) 守田志郎。二宮尊徳。農山漁村文化協会，2003，p.287，（人間選書，247）。

- 11) 加藤仁平. 永遠に生きる二宮尊徳. 報徳同志会, 1958, p. 11-16.
- 12) 小田原市立図書館. 報徳集書解説目録. 小田原市立図書館, 1988, p. 4.
(小田原市立図書館目録シリーズ, 11).
- 13) 二宮康裕. 二宮金次郎. 創元社, 2013, p. 3.
- 14) 大藤修. 二宮尊徳. 吉川弘文館, 2015, p. 293, (人物叢書, 新装版).
- 15) 前掲9) p. 26.
- 16) 竹内誠編. 深井雅海編. 日本近世人名辞典. 吉川弘文館, 2005, p. 693-694.
- 17) 前掲6) p. 38, p. 56-58.
- 18) 伊勢原市史編集委員会編. 伊勢原市史 資料編 [2-2]. 伊勢原市, 1994. p. 673.
- 19) 若槻武行. 安居院庄七. 東京六法出版, 2009, p. 11-56.
- 20) 中野敬次郎. 小田原近代百年史. 形成社, 1968. p. 670-677.
- 21) 前掲9) p. 149.
- 22) 大澤輝嘉. 慶應義塾史跡めぐり 第30回 箱根 福住・南足柄 福沢小学校一福澤先生と箱根開発. 三田評論. 2008, 第1118号, p. 73.
- 23) 佐々井典比古. 尊徳の森. 有隣堂, 1998, p. 69.
- 24) 八木繁樹. 報徳に生きた人びと. 総和社, 1994, p. 251.
- 25) 留岡幸助編. 二宮尊徳と剣持広吉. 警醒社, 1907, p. 1-11.
- 26) 神奈川県県民部県史編集室編. 神奈川県史 別編1 人物篇. 神奈川県弘済会, 1983, p. 297.
- 27) 大木茂. 尊徳 上巻. 随想舎, 2003, p. 16.
- 28) 宇津木三郎. 二宮尊徳とその弟子たち. 夢工房, 2002, p. 120,
(小田原ライブラリー, 3).
- 29) 前掲6) p. 32, p. 48-53, p. 75.
- 30) 前掲9) p. 2.
- 31) 斎藤高行. 堀井純二編著. 註報徳外記. 錦正社, 2002, p. 224-229, (国学研究叢書).
- 32) 前掲9) p. 10, p. 148.
- 33) 前掲11) p. 289.
- 34) 八木繁樹. 報徳運動100年のあゆみ. 龍溪書舎, 1980, p. 598-605.
- 35) 前掲6) p. 157-159.

- 36) 神奈川県尊徳会編. 神奈川県尊徳会要覧. 神奈川県尊徳会, 1941, p. 15.
- 37) 前掲6) p. 128—129.
- 38) 佐々井典比古編. 佐々井信太郎略伝. 一円融合会, 1981, p. 801—p. 816.
- 39) 岩井茂樹. 日本人の肖像 二宮金次郎. 角川学芸出版, 2010, p. 14—15, p. 22—23, p. 57, p. 84, (角川叢書, 45).
- 40) 佐々井信太郎. 福住正兄翁傳. 改定版, 報徳文庫, 1991, p. 85.
- 41) 前掲13) p. 857.
- 42) 朝倉治彦編. 明治初期官員録・職員録集成 2. 柏書房, 1981, p. 144, p. 181.
- 43) 草山惇造. 草山貞胤翁. 草山惇造, 1915.
- 44) 平塚市博物館編. 幕末の村おこし. 平塚市博物館, 2007.
- 45) 秦野市農業協同組合編. 天地の詩 [抜刷]. 秦野市農業協同組合, 2003.